



たくま
長野 拓磨さん

●犬伏小学校 6年

未来のサッカー選手に

ぼくは、日本代表になるためにサッカーを続けています。プロサッカー選手になるために、毎週4回の練習に取り組んでいます。海外で行われているサッカーの試合をテレビで見て、相手のかわり方や足技についての勉強もしています。

ぼくが目指している選手は、ブラジル代表のネイマール選手です。彼の足下の技術はすばらしく、あこがれです。彼のような選手になりたいです。

これからも努力を続け、日本代表入りを果たしたいです。



佐野ブランドキャラクター
さのまる © 佐野市

市長からの
メッセージ



市民の皆さんには、すがすがしく新春をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。

昨年をふり返りますと、念願であった北関東自動車道出流原PAへのスマートインターチェンジ設置の事業化が7月に決定されたほか、11月には総合物流拠点の核となる「内陸の港」佐野インランドポートも動きはじめました。

また、1年をかけて準備してきました全国山城サミットが国指定史跡「唐沢山城跡」を舞台に開催され、延べ1万人もの歴史ファン・山城ファンが本市に集結し、大盛況を博するなど、交流拠点都市を目指す本市にとりまして、大変実りの多い年でありました。山城サミットは天候に恵まれ、絶好の紅葉のなか高石垣をはじめとする唐沢山城跡の魅力を全国へ発信することができました。大勢のボランティアをはじめ関係者の皆さんに心から感謝いたします。

さて、今年には本市のまちづくりの方向性を示す「第2次佐野市総合計画」が4月からスタートします。これまでの「観光立市」「スポーツ立市」に加え「産業・文化立市」をリーディングプロジェクトに位置付け、新たな産業基盤の整備や雇用の創出を図るとともに、本市が誇る歴史・伝統など様々な文化資源を活用することで、新たな人の流れを作り地域経済の活性化につなげてまいります。

7日には、市内3会場で成人式が行われます。将来の佐野市を担う若者たちが地元に戻り活躍できるよう、雇用の充実に向けた取り組みを推進してまいります。

今年には戌年です。「戌」という字は実を刈り取った後の状態を意味しており、次に進むための新しいステップの年であると言えます。昨年得た成果をゴールとせず、スタートとして「さのまる」と一緒にオンリー・ワンのまちづくりを進めてまいります。

今年1年が皆さんにとって素晴らしい年となりますよう心からご祈念申し上げます。

岡部正英



今回の表紙 国指定史跡唐沢山城跡の高石垣に差し込む朝日

11月25日・26日に開催した「全国山城サミット in 佐野」には、市内外から2日間で1万人もの方にご参加いただきました。

アプリを使ってスマートフォンをかざすと、2日目の唐沢山でのイベントの様子を見ることができます。アプリのダウンロード方法は、裏表紙をご覧ください。

たけし
中谷 剛 さん



○プロフィール

昭和59年、佐野高校を卒業。平成3年からポーランドに移住し、現在は、同国の国立アウシュビッツ博物館で唯一の日本人公式ガイドを務める。

キラリ★
話題の「ひと」

ようこそ先輩！

県立佐野高校・附属中学校では各界で活躍する卒業生を招き、毎年講演会を開催しています。

12月4日には、国立アウシュビッツ博物館初の外国人公式ガイド・中谷剛さんがポーランドより来校され「アウシュビッツで学んだ20年くらい、後輩に伝えたいこと」と題し、在校生に向けて講演されました。

中谷さんは、高校生の時に担任の世界史の先生から影響を受けて今日の自分があること、田中正造とアウシュビッツに共通するキーワードとして、人間が等しく生きていく権利である『人権』がいかに大切であるかを静かに語りかけました。

佐野高校・附属中学校の生徒約700人、保護者、一般の方と、参加者の年齢幅は広く、中谷さんの話の受け止め方はさまざまです。この講演を聴き、この中の誰か一人でも今後の生き方に響いてくれたらと願っています」と中谷さん



講演会の様子

は結びます。

中谷さんは講演後、「ポーランドで日本のニュースを見て危惧しています。ヘイトスピーチに驚かされ、また悪意なくヒトラーをまねる人もいます。知らないということは怖いことだ。その原因は教育にほかならない。それは現場の教師の問題ではなく、国の方針に責任がある」と、多感な年代の日本の若者たちが歴史から学ぶことの重要性を強く語られました。いま私たちが何気なくしていることは、次世代を左右していくことなのだ」と再認識させられます。

戦後72年が経過し、人間による惨劇であるアウシュビッツは「加害」、一方ヒロシマは「被害」の立場として、これまでそれぞれの役割を果たしてこられたか。中谷さんから在校生に投げられたボールは重いものですが、実はとてもシンプルなメッセージなのかもしれません。

今回の来日では、長野や新潟、大阪でも講演をされること。佐野市にゆかりのある方が国際的視野で歴史を継承してくださるのは、誇らしいですね。(市民記者 永倉文子)

佐野弁とい
岩場の方言のいろいろ
急斜面で危険な岩場をユワツカジラと
いう

草木の生えていない山を禿山、坊主山、裸山などといい、岩や石が多い山を岩山といひます。対して山で岩の多くある場所を、方言ではユワツバ、ユワツカラなどといひます。山の断崖に岩が突き出ている、人が足を踏み入れることのできないような危険なところを、ユワツカジラといひます。イワに付く「バ」「カラ」「カジラ」は、岩が多くあるところという意味です。

「この辺はユワツバだから、フンゲシサネーように(ねんざしないように)、またオツコロガってー(転んで)けがをしないうように、足元にキーツけな」

踏み入れることができないような、険しく切り立っているユワツカジラには、石斛というめずらしい植物が着生していることがあります。白く咲く花は観賞用として栽培されます。岩場にあるたくさんの岩には、きわ立って露出したものがあり、その先端部分をイワツバナといひます。岩が鼻のように突き出ているからです。山の斜面を覆っている土砂などが、暴風雨などで崩れ落ち、岩肌がむき出しになることがあります。そのような場所をジャバゴケといひます。ジャバゴケの「ジャバ」は、砂利場の変化語、「ゴケ」は、転げ落ちる、崩れ落ちるといひの意味です。

「ジャバゴケの下の方で、釣りをするのはアブネー(あぶない)よ。石ツコがヒョエヒョエ(時々)オッコテクツカンネ(落ちてくるからね)」

(市民記者 森下喜一)